



おかやま環境ネットワーク

No.93
2018.11

NEWS

発行:公益財団法人おかやま環境ネットワーク
〒700-0026 岡山市北区奉還町1-7-7
TEL/FAX 086-256-2565
E-mail:kankyounet@okayama.coop
HP:http://www.okayama.coop/kankyounet/

『里海』生誕20周年記念シンポジウム

“里海Satoumi”生誕20周年の歩み～振り返りから将来展望～』開催報告

- ◆日時：8月25日（土）9時～17時
- ◆会場：備前市立日生市民会館
- ◆参加：256名
- ◆内容：“里海”は、1998年に九州大学の柳哲雄教授によって提唱され、「人手が加わることで生物多様性と生産性が高くなった沿岸海域」と定義されました。2018年5月に閣議決定された第3期海洋基本計画においても、「高い生産性と生物多様性が維持されている“里海”の経験を沿岸域の総合的管理等に積極的に活用」していくことが明記されています。

“瀬戸内海生まれ日本発”の“里海”は、2006年の世界閉鎖性海域環境保全会議で紹介されて以来、国際的にも注目されるようになりました。今回のシンポジウムでは、“里海”が誕生して20周年を迎えた中で、“里海”づくりに奔走する様々な立場の人達が世代や地域、立場を越えて一堂に会し、「世界に発信する日本の“Satoumi”」について、基調講演、各地からの報告、パネルディスカッションを通して考える場となりました。

“瀬戸内海生まれ日本発”の“里海”は、2006年の世界閉鎖性海域環境保全会議で紹介されて以来、国際的にも注目されるようになりました。今回のシンポジウムでは、“里海”が誕生して20周年を迎えた中で、“里海”づくりに奔走する様々な立場の人達が世代や地域、立場を越えて一堂に会し、「世界に発信する日本の“Satoumi”」について、基調講演、各地からの報告、パネルディスカッションを通して考える場となりました。

□基調講演Ⅰ「“里海 Satoumi” 20年歩み」

“里海”という言葉と概念の生みの親である柳哲雄氏（九州大学名誉教授）より、沿岸域での海洋汚染問題が一段落し、“きれいな海”から“豊かな海”が望まれるようになってきた1998年当時、里山で「人手を加えることで生物多様性が高まる」ことと同じように、里海においても、海洋生物の新たな生息環境を整備するための人手と藻場などの海洋植生を極相に至らせないようにする人手を、順応管理的に加えることで、沿岸海域の生物多様性を高め、生産性を高めることが可能であることを実験結果に基いてまとめられた経過や、そのことを1997年にスウェーデンで開催された閉鎖性沿岸海域の環境管理会議で紹介された時の拒絶に近い反応だったものが、ヨーロッパ沿岸海域でも適切な人手を加えな

いと海洋環境の保全が出来ない状況になってきた結果、2006年にフランスで開催された同会議ではしっかりと受け止められ、今日に至っていることなどが紹介されました。



柳氏による基調講演

□基調講演Ⅱ「備前市日生“アマモとカキの里海”から見えるもの」

釣田いずみ氏（国立協力機構 JICA）からは、2012年から20回にわたって日生を訪れインタビューやアンケート、アマモ場再生に関連したイベント等を通して、日生において再生活動が30年以上もの間続けられてきた環境条件が示されました。

一つには、明治期より漁場争いや不公平を減らし資源を平等に維持分配する工夫を話し合いや調整によって実現してきたことで、再生活動による成果が長期間現れない中でも操業者の減少と高齢化に直面したツボ網（小型定置網漁）の漁師のみなさんがリーダーを中心に結束することが出来たこと、二つには、資源減少や海洋汚染などの課題に直面するようになった中で「つくり育てる漁業」としてはじめたカキ養殖の成功に向けても、「共同に尽きる」と言われるカキの成長段階に合わせた作業が行ない、カキの成長にもアマモがいい影響を与えるのではとの仲間の声を組合が一丸となって受け止めたこと、三つめには、日生の漁業を周辺からサポートする人々

が国や研究機関などからの助言や予算を得るための調整役を担い、最新の科学的知見や海洋政策の動向なども継続的に日生にもたらしめていること、活動の開始期に活躍された方々が一線を引かれた後も現役の漁協関係者のみなさんが意思を受け継ぎ精力的に活動されていること、さらには中学生や小学生など地域の子どもたちをも巻き込んだ地域での社会的なネットワークづくりに成功していることなどが紹介されました。

また、釣田氏の報告で紹介された子どもたちの取り組みとして、備前市立日生中学校及び学芸館高等学校の生徒のみなさんによる取り組み発表が行われました。

●備前市立日生中学校の報告

6年前に日生漁協の天倉専務から「アマモ場再生活動」への参加のお誘いを受けたことをきっかけに、アマモが「海のゆりかご」と呼ばれる意味を学び、海に育まれて生きる生物多様性の世界を知り、自分たちもまた海に育まれていることを実感する中で、それまでは作業として実施されていた海洋学習では感じる事ができなかった、海は眺めるものではなく「共に生きるもの」であり、海は陸と同じく「生活の場」であることを実感できるようになったこと等が発表されました。

●岡山学芸館高等学校の報告

「里海」のモデルケースとしてアマモ再生に取り組んでいる日生湾の実践例を参考に、課題研究に取り組めるテーマを検討していた時に、日生中学校の藤田教諭より体験学習への参加依頼があったことを受け、科目「生物基礎」の生態系や物質循環、環境の保全について学習を深めることができると考えカリキュラムとしたこと、今年度は総合学習の週1単位のカリキュラムとして授業展開を進めていること等が発表されました。

□基調講演Ⅲ「国際社会における里海の位置づけと役割～国際海洋政策における里海の貢献と社会平等に対する認識」

世界各地の海で現地調査と資源管理の学際的な研究に従事されている太田義孝氏（ワシントン大学）からは、里海の取り組みは、沿岸漁業を支える人々の活動がその海域の海洋保全にも貢献しているというような、たんに海洋保全を目的としたものではなく、それぞれの沿岸域ごとで独自に培われた風土や人々のつながりなどを基盤に、新たな地域コミュニティやエリア環境の創造に結びついていくなど文化

的な役割を担っていること、日生はその先進例であり、これは日本国内に限定されるものではなく、世界中の沿岸域での管理制度づくりにも通じるものであること等が報告されました。

□全国各地の里海からの事例紹介

太斎彰浩氏（一社サスティナビリティセンター）から、宮城県三陸町の取り組みとして、震災前はカキ養殖施設を無秩序に増やしてきたことによって、品質低下と成長時間の長期化により県内最低ランクの評価にまで落ち込んでいたカキ養殖が、震災後に「こども達に誇れる漁業を復活させたい」との思いから養殖場復旧に向け漁業者間で喧々諤々の議論の末、震災前の1/3に養殖施設を減らすことを決断した結果、実入りの良いカキが収穫できるようになり入札価格も県内トップレベルにまで引き上げることが出来たこと等が報告されました。

古川恵太氏（NPO法人海辺づくり研究会）から、東京湾の取り組みとして、繰り返されてきた埋立による地形変化や流入する淡水量の変化によって海辺の環境が変化・劣化に結び付いている現状を認識した上で、淡水や海水の循環環境を整えば、生物生息場の好適地となり得ることを2つの事例を挙げて報告されました。

浦中秀人氏（志摩市政策推進部里海部推進室）から、三重県志摩市の取り組みとして、“宝の海”と呼ぶにふさわしい志摩市の沿岸域でも1950年代半ばから貧酸素水塊が出現したり、赤潮や感染症の蔓延によって真珠の生産量の減少と品質の低下やアマモ群落の消滅などが続いている中で、志摩市では2004年に「環境の志—自然とともに生きる—」と政策に掲げ、英虞湾の自然再生に向け行政部局、研究者、産業関係団体、自治体、市民活動団体の代表が集まって協議が始まっていること、2016年の伊勢志摩サミットを契機にSDGsの掲げる持続可能な社会づくりの軸に食を据え、干潟や藻場の再生やイセエビなどの資源管理などに取り組んでいることが報告されました。

天倉辰巳氏（日生町漁業協同組合）からは、日生の取り組みとして、アマモ場再生活動のきっかけ（前述の釣田氏欄で文章化したため割愛させていただきます）や2012年に日生漁業協同組合、NPO法人里海づくり研究会、おかやまコープ、岡山県による4者協定を締結し県内に広く再生活動を伝えたり、小中高校の海洋教育の場として五感で日生の海を感じる取り組みを進めていることが報告されました。

中西正光氏（香川県環境森林部環境管理課里海グループ）からは、香川県の取り組みとして、『か

がわ「里海」づくりビジョン』を策定し県民みんな「人と自然が共生する持続可能な豊かな海」の実現をめざし、里海の魅力を発信する人材づくりに向けた「かがわ里海大学」を開校したこと、県民に里海づくりに関わってもらえるよう「海辺のお出かけマップ」「里海ムービー」の作成や企業向けの里海づくりセミナーを開催していることなどが報告されました。

山城正己氏（恩納村漁業協同組合）からは、沖縄県恩納村の取り組みとして、1998年からサンゴ礁保全のための養殖や植付などの「サンゴ礁の海を育む活動」に取り組んでいること、水産加工業者や全国の生協と連携してモズク商品の売り上げの一部を積み立てる「もずく基金」が再生活動を支えていること、「恩納村の宝であるサンゴ」を行政・企業・協同組合等の諸団体や村民が一体となって村づくりや地域おこしを進めていることが報告されました。

□参加された方の声



パネルディスカッション

- ・瀬戸内人として里海ははずせない事と思っています。とにかくおもしろくて、気になっていた事で学ぶことが多くて、楽しかったです。
- ・各所の活動に特長があってそれぞれがいい方向で広がっていることが他の地域にも広がると良いと思います（海外含めて）。
- ・高校に進学してから海に関わるようになり、海は人間の生活にすごく大きな影響を与えていること実感しています。今日は地域の話からグローバルな取り組みまで聞くことができ楽しかったです。
- ・学校の海洋学習で日生の海について学習していますが、まだ日生の海しか知らなかったのので、全国の海で行われている取り組みや、世界の海で抱えている問題について聞いてとても興味深かったです。
- ・たくさんの事例を聞くことが出来て楽しかったです。勉強になりました。
- ・中学生高校生の発表は大変分かり易く参考になっ

た。これからも活動に励んでほしい。

- ・ところ変われば様子も変わる。取り組みの多様性を知ることが出来ました。勉強になりました。
- ・学生が海に興味を持つようになったことが里海活動の大きな成果だと思います。さらに先の目標として漁師になって地元の海を守る若者を増やすことだと思いました。今日の学生の中に漁師になりたいという意見がなかったのが残念でした。瀬戸内海には事業を行おうとすると補償を求める漁協が多い中、日生は健全で良識のある漁業者が多いと感じました。いくら良い里海活動をしても後継者に代わる新規参入者が入らないと日本の海と漁業はつぶれてしまうと考えます。
- ・取り組みを続けて発展させてほしい。日生の取り組みが世界につながっている最新事例であることがわかりました。水産政策の最新情報の話が聞いてよかったです。経済も回るところが地元根付くと思います。
- ・藻場の再生→稚魚等の住処確保→漁業者の収入維持・向上あたりまでの思考しか持ちあわせていなかったため、SDGsなど社会への影響・循環といったお話が聞いてよかったです。

（演者のみなさま等から寄せられた感想）

- ・「里海」が20年の時を経て漁業と海との共生関係の確立というカテゴリーから森川里海をつなぐ沿岸域総合管理を含めて、日本の沿岸域のコミュニティを継続するための地域ガバナンスの理念という所まで議論が拡大してきていることを実感し、その大きな流れを動かそうとされている皆さんのお話を伺えた。里海をキーワードとして持続可能な地域をボトムアップで構築していくことは全国の沿岸漁業をベースに生業を構築してきた地域にとって非常に重要なことだと思います。地域ごとに多様な環境・経済・社会条件がある中で、地域ごとによりベターな「里海」を創生していくために、今後も里海シンポジウムが継続されて、多くの人々を巻き込みながら議論を深め、全国で取り組みが展開されていくようにすることが重要だと感じました。

なお、備前市立日生中学校、岡山学芸館高校、及び備前市立日生小学校のみなさんによる海洋教育の取り組みは、「海洋教育シンポジウム 子どもたちが拓く〈地方再生〉の未来 ～海洋教育の可能性を考える～」で詳しい報告が予定されています。

ぜひ、ご来場下さい。

2018年度海洋教育パイオニアスクールプログラム地域カンファレンス

子どもたちが拓く〈地方再生〉の未来 ～海洋教育の可能性を考える～



海洋教育シンポジウム

日時

2019年 1月 26日(土) 13:30-17:00
13:00 開場

場所

オルガ地下ホール
岡山市北区奉還町 1-7-7 (岡山駅西口)
[TEL] 086-254-7244

参加費

無料

《申込み》1月18日までに 裏面「参加申込書」
により郵送・FAX・メールでお願いします。

【開催趣旨】

備前市日生(ひなせ)が「アマモ場再生活動発祥の地」、「里海づくりのトップランナー」と呼ばれ、国内はもとより世界各地からも注目されるようになって久しい。それは、30数年間の長きに亘り、日生の漁師たちが決して諦めることなく地道に取り組んできたアマモ場再生活動の軌跡に対する賞賛の呼称である。しかし、つい最近までほとんどの地元住民はこの事を知らなかった。生徒達もまた、自分たちが日々目にする海の危機を知る由もなく、関心も皆無であった。6年前に地元の日生中学校がアマモ場再生活動に参加するようになり、海洋教育の発展と深化とともに、生徒たちの海に対する認識と意識は大きく変わった。もはや「アマモ」や「里海」の言葉を知らない生徒はいない。生徒たちの口から海洋学習の楽しさ、アマモの大切さ、海の危機と里海的重要性は、保護者や地域住民へと広がっていき、学校教育が、生徒を通じて「地方再生」への大きな動きとなっている。

この海洋教育シンポジウムでは、海洋学習に取り組んでいる日生西小学校・日生中学校・岡山学芸館高校の代表生徒から実践活動について発表し、日生に深く関わってきた3名の演者を招き、それぞれの視点から「日生と里海」、「教育と地方再生」について議論し考える。

《基調講演》



● 松田治氏：広島大学名誉教授・NPO 里海づくり研究会議理事長。専門は物質循環論・沿岸環境管理など。「瀬戸内海を里海に」、「森里海連環学」、「海洋問題入門」など著書多数。環境省の行政委員ほか多くの要職を歴任。



上原拓郎氏：立命館大学政策科学部准教授。米国ポートランド州立大学でPhD (Systems Science: Economics) を取得。専門は経済学・環境政策など。「社会生態系」の観点から沿岸域サステイナビリティ評価手法の開発等に取り組む。



吉野奈保子氏：NPO 法人共存の森ネットワーク理事・事務局長。民族文化映像研究所にて日本各地の農山漁村の生活文化の研究に従事した後、2002年より農水省、文科省、環境省等と共に「聞き書き甲子園」を主催、今年で第17回を迎える。



主催：備前市立日生西小学校・備前市立日生中学校・岡山学芸館高校

共催：NPO 里海づくり研究会議・生活協同組合おかやまコープ・(公財)おかやま環境ネットワーク

後援：岡山県・備前市・真庭市・笠岡市・岡山市・岡山市ESD推進協議会



◇プログラム◇ *敬称略

13:30～13:40 開会あいさつ 加藤武史／岡山学芸館高校 副校長

13:40～14:05 基調講演Ⅰ 「里海と地域振興をつなぐ」

松田 治／広島大学名誉教授・NPO 里海づくり研究会議 理事長

全国的な拡がりをみせている里海づくりは、多様な人々が連携して地域に豊かな海を実現する取組みであり、環境、景観、生態系や水産資源状況の改善などが期待できる。このような成果は、水産関連産業やツーリズムなどに関係が深く、地域振興や地方再生にもつながっている。特に、人口減少が進む地方では、里海活動による地域の賑わいと新たなきずなが強くと求められている。取り組み事例を紹介しながら、このような活動の持続のために必要な次世代に向けた海洋教育の重要性について考えたい。

14:05～15:00 実践活動発表 備前市立日生西小学校・備前市立日生中学校・岡山学芸館高校

15:00～15:30 基調講演Ⅱ 「海洋学習がつなぐ生徒と海と地域社会」

上原拓郎／立命館大学政策科学部准教授

全国海洋学習は生徒の学びの機会としてだけでなく、地域にとっても重要であると考えられる。本講演では日生中学校の海洋学習を事例として、(1) 生徒と海、生徒と地域とのつながりの醸成に果たす海洋学習の役割、そして(2) つながりを醸成する機会としての海洋学習に対する地域住民の評価、について解説する。

15:30～16:00 基調講演Ⅲ 「子どもたちは地域をつなぐ」

吉野奈保子／NPO 法人 共存の森ネットワーク 理事・事務局長

全国の高校生が参加する「聞き書き甲子園」の活動を通して、「聞き書き」という手法は、単に記録を残すためにあるのではなく、人と人との信頼関係を醸成するコミュニケーション・ツールであると感じる。「聞く」という行為を通して、子どもは、地域社会や大人たちとの接点を得る。子どもたち自身が地域をつなぎ、地域を変える原動力となり得ることを、日生中学校の海洋学習などを事例に話す。

16:00～16:10 休憩

16:10～17:10 パネルディスカッション

『子どもたちが拓く“地方再生”の未来－海洋教育の可能性を考える－』

〈コーディネーター〉

藤田孝志／備前市立日生中学校 教諭

〈パネリスト〉

松田 治・上原拓郎・吉野奈保子（前出）

備前市立日生西小学校・備前市立日生中学校・岡山学芸館高校の各学校代表生徒

17:10～17:20 閉会あいさつ（総評）

柳 哲雄／九州大学名誉教授・NPO 里海づくり研究会議 副理事長

〈司 会〉 田中文裕／NPO 里海づくり研究会議理事・事務局長

参加申込書 『海洋教育シンポジウム』(2019年1月26日開催)

子どもたちが拓く〈地方再生〉の未来－海洋教育の可能性を考える－

フリガナ お名前	(参加者数 名)	ご所属 団体名	
ご連絡先(お電話番号またはメールアドレス)			

※複数でご参加の場合は、代表1名のお名前を記入のうえ、カッコ内に人数をご記入ください。

※お申し込みでご提供いただいた個人情報は、この行事企画以外には使用致しません。

【FAX・メール・郵送でのお申し込み】

公益財団法人おかやま環境ネットワーク 〒700-0026岡山市北区奉還町1-7-7

TEL & FAX 086-256-2565 / 携帯 070-2355-1420 / E-mail: kankyounet@okayama.coop

2018 年度市民のための環境講座

「大雨災害から身を守る」

～線状降水帯、気象情報の活用～

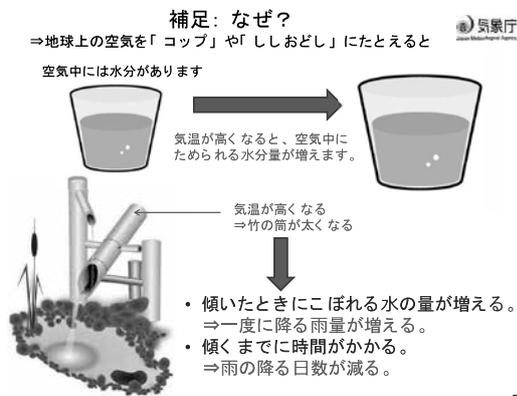
岡山地方気象台

10月27日、岡山地方気象台より観測予報管理官の楠田和博氏をお招きし、記録的短時間大雨情報の発生状況やこれまでとは異なる規模の豪雨をもたらす線状降水帯による豪雨メカニズムなど温暖化による気象変化の最新情報を学びました。

●大雨は増加傾向、雨日数の減少傾向

1時間降水量50ミリ以上の非常に激しい雨の年間観測回数は増加傾向(1976年から2017年の統計)にあり、反対に、日降水量1.0ミリ以上の雨が降った年間日数は減少傾向(1900年から2017年の統計)にあります。

これは、コップに例えると、気温が高くなることで空気中に貯められる水分量が増える(コップが大きくなる)こととなります。そのコップをししおどしに置き換えると、竹の筒が太くなったことと同じで、傾いたときにこぼれる水の量が増える(一度に降る雨量が増える)ことと、傾くまでに時間がかかる(雨の降る日数が減る)ことを同時に説明することができます。



このような、長期的な増加・減少傾向には、「地球温暖化」が影響している可能性が考えられるとのことでした。

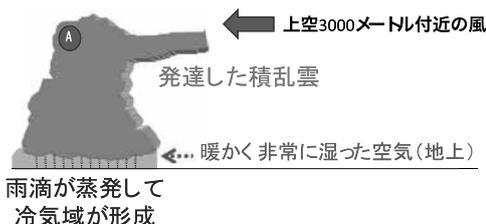
●線状降水帯

通常の積乱雲では、地上近くの水蒸気が急激に上昇し、上空で雲粒(粒径0.02mm)から霧粒(0.2mm)を経て雨粒(粒径4mm)にまで成長したものが、一気に落下する際に上昇してくる水蒸気も巻き込んで落下することで、新たな水蒸気の上昇(供給)を絶つために、一つの積乱雲の生成から衰退までは1

時間程度だそうです。

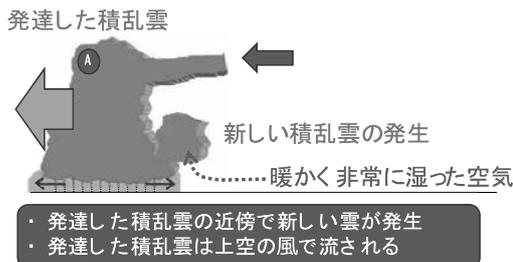
ところが、暖かく非常に湿った空気が供給され続けると、風下に移動した積乱雲の後(風上側)に新しい積乱雲が次々と形成されるバックビルディングという現象が発生、それに伴って、同じ場所に激しい雨が降り続くものを線状降水帯と呼ぶそうです。

集中豪雨時のバックビルディング形成①



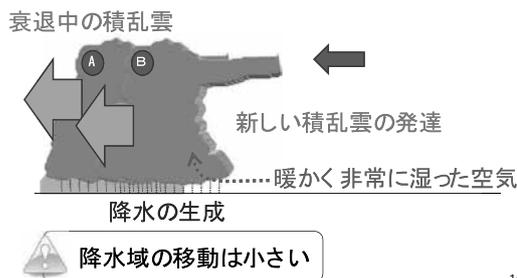
14

集中豪雨時のバックビルディング形成②



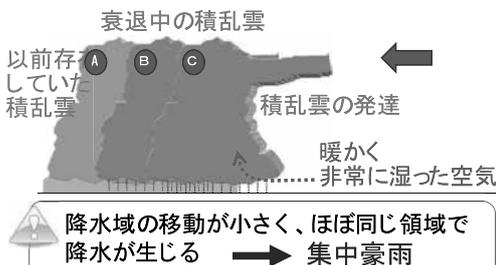
15

集中豪雨時のバックビルディング形成③



16

集中豪雨時のバックビルディング形成④



17

一つの積乱雲の大きさは直径で5～15km程度ですが、線状降水帯となると50kmから300kmの帯状のエリアで激しい雨が降ることになります。

線状降水帯には定義があり、①3時間積算降水量が80mm以上の分布域が線状（長軸対短軸の比が2以上）、②面積が500km²以上、③①の領域内の3時間積算降雨の最大値が100mm以上、の3条件にあてはまったものが線状降水帯と呼ばれ、それ以外は集中豪雨として区分されるそうです。

平成30年7月豪雨における線状降水帯の発生回数

気象庁の報道発表資料より



2018年7月の西日本豪雨では、岡山県内でも倉敷市真備町だけでなく県南の広いエリアで河川の氾濫による家屋の被害が発生しました。しかし、岡山県内では線状降水帯は確認されていません。それでも、48時間降水量で400mmを超える雨量が観測されています。

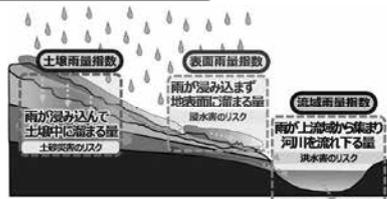
●気象災害から身を守る

今回は、大地震等による避難リスクではなく、大雨とそれによって発生する土砂崩れや河川の氾濫によるリスクについて学びました。

例えば、岡山市では、「洪水・土砂災害ハザードマップ（中区・東区・南区版）」が作成され、岡山市のHPにも掲載されています。どのエリアがどの程度の浸水被害を受ける可能性があるかが色づけして示されています。これを見て、住んでいる地域でどんなリスクがあるかを予め把握しておくこと、そのリスクをご家族で話し合い、どう避難をするかを決めておくことが大切とのことでした。

大雨警報・洪水警報の危険度分布（概要）

雨により災害リスクが高まるメカニズム



「危険度分布」は単なる雨の量を表しているのではなく、雨による土砂災害・浸水害・洪水災害の危険度の高さを表しています。
「雨がしみ込んで土壌中に溜まる」「雨がしみ込まず地表面に溜まる」「雨が上流域から集まり河川を流れ下る」という効果を計算することで、それぞれ土砂災害・浸水害・洪水害の危険度の高さが算出できるようになりました。

その上で、気象台が発表する警報等をしっかり確認して、今どうすべきかを考えることが大切とのことでした。現在の警報は、単に雨量によって警報を発令しているのではなく、地域ごとの土壌がどれだけ雨水を溜めることができるかをベースに、あとどれだけ溜めることができるか・地表面に留まることができるか等を計算し危険度を算定して発令されており、正確度が高くなっているとのことでした。

気象台が発表する防災気象情報（注意報・警報・特別警報、土砂災害警戒情報など）の意味を理解しておくこと、スマホやパソコンで自分から情報を取りに行くこと大切とのことでした。

「自分は大丈夫！」とは思わない



人には「たぶん大丈夫」「自分は大丈夫」と、自分に都合よく考えてしまう傾向があります。このような考えをすてて、安全第一の行動を取りましょう！

せいじょうかのへんけん
このような心理傾向を「正常化の偏見」といいます。

72

2017年の九州北部豪雨の際には、空気中の水蒸気量が多かったことが要因と言われました。豪雨後のデータ解析で、水蒸気量を5%増やすと予測雨量が3倍になることが確認されています（気象庁・気象研究所：瀬古氏）。

さらに、2018年の西日本豪雨をもたらした気流には、九州北部豪雨よりも約10～20%も多く、台風を中心付近に匹敵する水蒸気が含まれており、それが台風よりも長時間にわたって同じエリアに水蒸気を供給し続けていたとの分析もあります（名古屋大学・坪木教授）。

日本近海の海水温の上昇で、勢力の強い台風が、勢力が強いまま日本に接近・上陸する可能性も高まっていますが、台風でなくても、気温の上昇という自然環境の変化（空気中の水蒸気量がこれまでよりも多くなっている）によって、これまでとは違う雨の降り方が今後も発生する可能性が高くなっているのであれば、早めの避難行動が取れるよう、平時のうちにもしもの準備を整えておく必要があります。（事務局）

環境家計簿カレンダーの 同封

おかやま環境ネットワークと岡山市とが協働ですすめています「環境家計簿活動」の啓発資料として『おかやま環境家計簿カレンダー2019』ができあがりました。会員の皆様、モニターの皆様と同封しています。

普段の暮らしの中でできる、二酸化炭素の排出削減、ゴミの適切な排出、資源の有効利用など、ご家族のみなさんで一緒に考え、行動に起こしていただけそうなポイントを簡潔にまとめています。

ぜひ、ご活用ください。

2019年度事業計画に ついて

おかやま環境ネットワークでは、地域の皆様と一緒に環境保全に関する様々な取り組みをすすめています。

定款では、「この法人は、ふるさと岡山の自然とくらしに関する環境保全及び環境問題の解決に向け、研究・啓発活動をはじめ、県内の環境活動団体の交流や相互支援の促進を図り、もって地球環境保全に寄与することを目的とする。」と定めています。

2019年度に、環境ネットワークはどんなことに取り組むことが必要だと考えますか？

2019年度に、環境ネットワークと共催等の協働が考えられる事業がありますか？

協働事業が実現すれば、事業費の削減、運営、広報等に関して相乗効果も見込まれ、より多くの企画参加の可能性もありま

す。

団体・法人・個人は問いません。アイデア段階のものを含め、期待すること、ご検討されることがありましたら、お名前・連絡先（内容の詳細等をお伺いするため）を明記して、メール・FAX・郵便で、事務局までご連絡下さい。

ニュースへのチラシ等の 同封物に関するお知らせ

おかやま環境ネットワークで年4回（5・7・11・3月発行予定）会員の皆様にニュースを発行しています。ここに、会員団体の各種イベントのチラシ等を同封することができます。

同封希望がありましたら、発行前月の第2週末までに事務局へご連絡ください。

※メールニュースは毎月第2・4水曜日を基本に発行しています。メールニュースへ掲載希望がありましたら、毎月第2・4月曜日までに原稿を事務局に送信ください。

※特に「助成団体の対象事業」に関しましては、より広くお知らせをしていきたいと考えていますので、是非ご連絡ください。

メールニュース配信 希望者募集中

おかやま環境ネットワークの情報や、会員団体のイベント情報等を掲載しています。

配信をご希望の方は、メールにて件名：『メールニュース配信希望』とし、メールアドレス・お名前（必須）、連絡先・所属団体・会社名（任意）をメール文にご記入の上で、右記事務局

アドレスまで送信ください。

現在1,300名を超えるみなさんにご登録いただいています。

個人・団体・企業 会員 募集中

おかやま環境ネットワークは、皆様からの会費、寄附、ボランティア活動で支えられています。ぜひ会員となり、活動をご支援ください。

【年会費】

個人・団体：2,000円

企業等：20,000円

大学生・大学院生・高校生：無料



2018年度会費をまだ納付いただいていない会員の皆様に振込用紙を同封しておりますので、お振込みくださいますよう、お願いいたします（入れ違いでお振り込みいただいておりますらご容赦ください）。

会費は、企業・協同組合：1口2万円、団体・NPO法人・個人：1口2千円、1口以上をお願いいたします。

発行：公益財団法人おかやま 環境ネットワーク

〒700-0026
岡山市北区奉還町1-7-7(オルガ6階)
TEL/FAX：086-256-2565
携帯電話：070-2355-1420
E-mail:kankyounet@okayama.coop
HP:https://okayama.coop/kankyounet/